

ルーミスジミの飼育法

作成：2006.4.27 仲西周二

改定：2018.12.16



母蝶採集

房総の虫屋さん達の観察情報によれば、本種の交尾時期は越冬を終えた3月末～4月上旬のようだ。従って母蝶採集時期は4月中旬以降で、極力早目が良い。房総の山地に比べ東京地区の檜類の芽吹きは早く、遅くなると採卵用の新芽は勿論、終令頃に使用する若葉の調達にも苦労する。反面、4月中旬ごろは例年好天が少なく、採集機会は多くない。こんな理由もあり、母蝶数が最も多くなるGW頃の採集を聞くことが多いのだろう。最も早い事例では、4/16日に採集された母蝶を頂戴して採卵させたが、4/18日から産卵を始め結局70卵ほど産卵した。私自身の採集例では、4/22採集の2母蝶は直ぐには産卵せず、5/2から産卵を始めている。

秋の成虫採集ポイントは山中の谷筋が多いが、春の母蝶採集は産卵に飛来する母蝶を林道の食樹周辺で待ち長竿で採集するとよい。

本種は母蝶採集の頃でも♂がまだ活動しているので、採集個体の雌雄判別法を知っておきたい。♀の腹端裏側には三角形の黒褐色部があり、♂は腹部末端まで灰白色のモノトーンである。採集個体を透明カップに入れて腹部裏側を観察することで、現地で簡単に雌雄判別ができる。

採卵

採卵装置はゼフィルスの採卵同様に小型吹き流しを使い、吹き流しの底に吸水オアシスを敷きその上にカップ挿したアカガシの新芽を載せる。アカガシの芽が重要で、ようやく動き始めたばかりのまだ固い大きな芽がよい。緑の葉が見え始めた芽は論外で、指で押して僅かに軟らかさを感じる程度の硬い芽が好適である。母蝶への給餌は吹き流しの上、母蝶が良く静止する位置に、カット綿にポカリスエット50%希釈液を吸わせて置く。母蝶は自分でポカリスを吸引するほか、下に降りてオアシスから吸水もする。装置は南向き窓辺で、直射日光がぎりぎり当たらない明るい位置に終日置いている。



母蝶は容器内を飛んだり明るい側の吹き流し壁面を歩き回るが、時折芽に飛び移って産卵行動をとる。芽に対して横向きにとまり、鱗片内に産卵器を挿し込んで産卵する。

固い鱗片をこじ開けて産卵するには相当の時間を要すると想像したが、存外時間を要せずに産卵する。芽に止まっても産卵せずに離れる事も多く、吟味して芽が気に入らないと産卵しない。3日間、同じ芽のセットで採卵を続けた後、芽のセットを新しいものに交換する。卵の孵化期間が3～4日なので、最初に産卵された卵が孵化して幼虫が芽内部に潜入する前に回収するのが理由である。初日にセットした芽が3日も経つと伸びてしまい、好適な産卵状態でなくなる

のも理由である。

一枚の鱗片に産まれた卵は、あっても1～2卵が多いが、6卵産まれていた鱗片もあった。鱗片が緑色で薄い場合は裏側の卵が透けて見えたり、卵が多い時は鱗片が持ち上がって外観からその存在が分かることもある。



卵の回収

3日間の採卵を終えた芽のセットは、一つ一つ鱗片をピンセットで剥がして卵を回収する。卵は鱗片内側の側縁上部に産まれている。鱗片が固く重なり合う鱗片下部には産卵できず、重なりが緩い上部に卵は産まれる。母蝶が芽に横向きに止まるのは鱗片の側縁から産卵器を挿し込む為であり、卵が側縁に産まれることになる。

卵は白く目立つので見落とすことはない。いつ卵が出てくるか期待があって回収作業は楽しいが、使用した芽の全ての鱗片を調べるので根気がいる。鱗片は薄く、剥がすと直ぐに乾燥して丸まってしまう。これでは孵化に不都合なので、剥がした鱗片は吸水スポンジの上に並べるなどして丸まりを防ぐ。

産卵数は毎日4～5卵程度を長期間産み続けると聞いていたが、これは産卵のピークを過ぎた場合で、産卵初期には2頭3日間で90卵の実績もある。

孵化～幼虫の食い付け

鱗片の卵の周囲を鋏で小さく切り取り、細いテープ状の台紙に10卵ずつ木工ボンドで貼りつける。まだ開いてないアカガシの芽を瓶差しし、芽の先を指先でほぐして卵の貼りついた台紙（複数）を挿しこんでいく。卵期3～4日で孵化した初令幼虫は毛が白く見える黄緑色半透明の毛子で、台紙上で孵化後は芽に潜り込んで見えなくなる。台紙は一日一回点検して孵化幼虫を芽に残し、未孵化卵が残る台紙は孵化殻を除いた上で別のアカガシ芽に挿しこむ。芽に付いた幼虫数分かるので記録しておくが、同日孵化の幼虫だけが残るので以後の成長が揃い飼育上に便利である。大きな芽には10幼虫程度が残るようにしている。全産卵期間を通して未受精卵は混じらず、孵化率は100%であった。

若令幼虫の飼育

3～5日で2令に達した幼虫は黄緑色で透明感はなくなり、漸く伸び始めた葉裏に現れるので大きさの点でも見つけやすい。2令幼虫は伸長するアカガシ葉裏の綿毛を除けながら食べ進み、面白い特性として排除した綿毛を塊にして脇に残す。この綿毛塊は幼虫を探す格好の目印となり、その近くを探せば容易に幼虫を発見回収できる。アカガシ以外では毛玉は作らないので、食痕を頼りに目視で探す。



以後は適宜新しい餌に交換しながら育てる。卵を付けた芽が2令幼虫出現以前に傷むと幼虫の

減損が起きるが、条件が良ければこの状態で2令後半まで手を掛けずに放置できる。

3令幼虫以降の飼育

3令以降の幼虫は主としてアラカシ新葉の切枝を保水容器に挿して、百均のフードパックをメッシュ張りにして収容した。3令～終齢前半の幼虫の体色は一様な黄緑色、形態は薄い草鞋状でムラサキシジミやムラサキツバメに酷似するが、さらに一段と厚みが薄い。葉裏に密着し、葉の先端や辺縁から基部に向けて食痕を残す。終齢後期になると体側部が青味を帯び、数本の粗い吐糸で葉縁を引き寄せて営巣しその内側に静止する。体型もやや縮んで丸味を帯びるので前蛹と勘違いしかねないが、まだしばらくは荒食いして成長を続けるので給餌を絶やしてはいけない。幼虫期間24、5日を経て葉裏に薄緑色の帯蛹となる。5/2産卵開始のシリーズは、5/31に先頭個体が蛹化し、最後の蛹化は6/9であった。



蛹化直後の蛹は透明感のある薄緑色で、♂蛹の腹部には2個の精嚢が透けて見える。時間経過しても蛹は淡緑色を保ち、前翅前縁部辺りがうっすらレモン色を呈して美しい。褐色系に変わるムラサキシジミやムラサキツバメとは異なっている。10日～2週間ほどして翅部が白色に変わり、やがてブルーと辺縁部の黒色が浮き上がると羽化は翌日である。

留意事項

GW頃と言えば一般には飼育ゼフィルス羽化時期である。5月中旬から6月上旬に渡る飼育時期に新鮮な樫類若葉の調達に難題で、飼育の成否を左右する。初めて採卵に成功した2010年は終盤若葉の調達に困り、苦し紛れにウドンコ病などの病葉を混入させた可能性がある。原因の断定はできないが、終令末期から蛹化期にかけてウィルス病が発生し、瞬く間に広がって飼育中のルーミスは全滅した。そこまで酷くはなくても、大型成虫の羽化には早期飼育が肝要であり、都心部より気温が低い八王子などに出掛けて若葉を調達するなど、格別の努力を必要とする。芽吹きが遅いカシワを使用して通期を飼育したこともあるが、羽化成虫の大きさが小ぶりになってしまった。

以上